「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究（1年次／２年）

大分県教育センター教科研修・ICT 推進部
指導主事　　加藤　史章

Ⅰ　研究の背景

県教育センターでは、平成 23 年度の調査研究「校内研究等の実施状況に関する調査－一層やりがいのある校内研究のために－」を踏まえ、「『一層やりがいのある校内研究』手引書」（以下「手引書」）を平成 26 年に刊行し、県内小・中学校に配布したが、刊行後 10 年が経過し、内容を見直す時期に来ている。また、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」（令和４年 12 月）」においては「新たな教師の学びの姿」の一つである「協働的な教師の学び」の中で、「校内研修や授業研究など、『現場の経験』を含む学びが、同僚との学び合いなどを含む場として重要であると考えられる。」と示され、校内研究・校内研修の充実が求められている。

Ⅱ　現状と課題

大分県教育委員会は、「大分県公立学校教職員の人材育成方針（令和６年３月改訂）」において、「各学校における研究及び研修については、各学校の課題・重点目標など身近な課題意識に基づいて行われるものであり、教員の自己研鑽の意欲を高め、OJT による資質向上を図るうえで重要な役割をもつことから、その成果が日常の教育活動へ転移、発展させる研修となるよう、内容の検討や方法の工夫が重要」と示している。しかし、県教育センターでは、平成 23 年度の調査（以下、「前回調査」）以降、現在の校内研究・校内研修に関する実態が十分に把握できておらず、特に高校（以下、「高」）は平成 23 年度の調査では調査対象外であったため、実態が掴めていない。

現状では、小・中学校（以下、「小・中」）は、在職期間７年以下の新任研究主任が 33%（n=87）を占めている。よって、組織的で実践的な校内研究・校内研修を推進する手引書が求められる。

本研究は２年計画で実施し、大分県の校内研究・校内研修についての現状をアンケート調査を通して把握するとともに、令和の日本型学校教育を担う教師の研修の在り方や実践事例を紹介する「手引書」の改訂を行うことで、大分県の更なる校内研究・校内研修の推進に資する。

Ⅲ　調査研究の内容

調査方法

県内の公立小・中（大分市を除く）と高を対象に、校種別の Web アンケート（令和６年７月 19 日～８月 23 日）を実施し、小 169 校、中 71 校、高校 43 校の計 283 校の回答を得られた。アンケートは主に「手引書の認知度と提唱する実践に関すること」、「校内研究・校内研修のテーマ設定に関すること」、「校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足に関すること」、「校内研究・校内研修に予想されること」の４領域 21 の質問項目で構成し、校種と各質問項目でクロス集計を行った。（【別添資料】参照） 校内研究と校内研修は、学校によって定義が異なる場合があるため、下記のように位置付け、回答を収集した。

○「校内研究」とは、研究主題を設定し、年度末に研究の成果をまとめること

○「校内研修」とは、教師の指導力向上のために、学校で計画を立てて実施する研修のこと

また、事例校調査として「NITS・教職大学院・教育委員会等コラボ研修プログラム支援事業」により、神奈川県の公立学校２校を訪問し、校内研修に係る視察を行った。

Ⅳ　調査・研究の結果

１　手引書の認知度とその実践に関することの結果

１－１　手引書の認知度と活用度に関する結果

手引書について、全校種で「知っている」と回答した割合は 60%であり、「活用したことがある」と回答した割合は 19%に留まっている。

１－２　研究仮説の必要性に関する結果

校内研究における「研究仮説の必要性」について、前回調査と同項目で調査し、校種別にまとめた（表１参照）

表１　校内研究を実施する上で「研究仮説」を立てることの必要性について

【令和６年度調査】

選択肢／校種	必要である	どちらかといえば必要	どちらかといえば必要ない	必要でない
小（n=169）	46%	31%	17%	7%
中（n=71）	32%	46%	15%	7%
小・中計(n=240)	42%	35%	16%	6%
高（n=28）	32%	61%	4%	4%
計（n=268）	41%	38%	15%	6%

【平成 23 年度調査】

選択肢／校種	必要である	どちらかといえば必要	どちらかといえば必要ない	必要でない
小（n=301）	90%	7%	2%	1%
中（n=133）	81%	17%	1%	1%
計（n=434）	87%	10%	2%	1%

※平成 23 年度調査では、高等学校は調査対象外。

※高はテーマ設定をしている 28 校のみ回答。

小・中の前回調査では「必要である」と回答した割合が全体の 87%であったが、今回の調査では 42%と低くなっている。否定的回答（「どちらかといえば必要ない」＋「必要ない」を表す）も、前回の３%から 21%となり、「研究仮説の必要性」を感じていない学校が増加した。高では、肯定的回答（「必要である」＋「どちらかといえば必要である」を表す）が 93%と著しく高い。

１－３　手引書の提唱する実践に関する結果

少人数チームの編成については、全校種で 77%の学校が実践している。校種別では、小が 83%、中が 74%、高が 54%の学校が少人数チームを組織している。学校課題に応じた研究期間の設定状況については、手引書が提唱する「１年間といった研究期間ではなく、学校課題に応じた研究期間を設定している」学校は 30%である。

２　校内研究・校内研修のテーマ設定に関することの結果

２－１　校内研究・校内研修のテーマの設定について

今年度の校内研究・校内研修の学校全体のテーマ設定については、小・中は 100%であり、高は、64%であった。国立教育政策研究所(2010)によると、「校内研究等の実施状況に関する調査」での類似質問（「学校として一つの研究テーマを設定し、校内研究に取り組んでいる」）に対する肯定的回答の割合は公立高校では 35%であり、全国のデータと比較すると高い。

２－２　校内研究・校内研修の研究テーマに影響した要因

表２は、研究テーマの設定に影響した要因について、想定される要素を 15 項目設け、肯定的回答の割合の高い５項目について、度合いの高いものから順に並べたものである。全校種で、「学校教育目標」の割合が 93%と高い一方で、「学校全体の教職員のニーズや

表２　テーマに影響した要因

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	91%	86%	81%	83%	74%
中（n=71）	88%	87%	89%	70%	81%
高（n=28）	91%	68%	72%	70%	72%
計（n=268）	93%	87%	85%	78%	78%

ア：学校教育目標
イ：昨年度までの研究成果や研究関心の継続
ウ：現在、直面している学校課題
エ：学校全体の教職員のニーズや意見
オ：学力調査やアンケートに基づく児童・生徒の実態

意見」や「学力調査やアンケート調査に基づく児童の実態」の割合が 78%とやや低くなっている。

３　校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足[i]に関することの結果

表３は、校内研究・校内研修における「手引書の活用」「課題に応じた研究期間の設定」「少人数チーム」「学校課題の共有」「教職員のチームワーク」「児童生徒理解の更なる深まり」の有無による学校群を比較するために、問 14～18 の５つの質問の回答より基本的心理欲求充足の平均値の差を算出し、ｔ 検定を実施したものについてまとめたものである。

①～⑥の全ての項目において、「あり」群のほうが基本的心理欲求充足(自律性、有能感、関係性)の平均値が高かった。各項目の有無による平均値の差についてｔ検定を行ったところ、②、④、⑤、⑥の項目において、有意差が認められた。以上の結果から、「手引書」で提言されていた「課題に応じた研究期間の設定」がなされている学校群や、「学校課題の共有」「教職員のチームワーク」「児童生徒理解の更なる深まり」が期待される学校群では、そうではない学校群に比べて基本的心理欲求が充足される可能性があることが示唆された。

表３　各項目の有無による基本的心理欲求充足の平均値の差

①手引書の活用	あり (n=54)	なし・知らない (n=229)	t値 (自由度=281)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.51	4.40	1.388
標準偏差	0.46	0.51	
②課題に応じた研究期間の設定	あり (n=80)	なし (n=189)	t値 (自由度=267)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.55	4.39	2.555*
標準偏差	0.45	0.51	
③少人数チーム	あり (n=215)	なし (n=68)	t値 (自由度=281)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.44	4.38	0.873
標準偏差	0.50	0.49	
④学校課題の共有	あり (n=179)	なし (n=104)	t値 (自由度=281)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.47	4.34	2.123*
標準偏差	0.49	0.50	
⑤教職員のチームワーク	あり (n=147)	なし (n=136)	t値 (自由度=248.8)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.60	4.24	6.421***
標準偏差	0.40	0.53	
⑥児童生徒理解の更なる深まり	あり (n=173)	なし (n=110)	t値 (自由度=281)
基本的心理欲求充足（平均値）	4.52	4.27	4.190***
標準偏差	0.47	0.51	

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001
※教職員のチームワークのみ、等分散を仮定しない場合の結果を示す。

自律性	ア：勤務校の教員は校内研究・校内研修に主体的に取り組めていると思いますか。(問 14)
有能感	イ：勤務校の教員は，校内研究・校内研修の際，個々の能力が発揮できていると思いますか。(問 15)
関係性	ウ：勤務校の教員は，校内研究・校内研修の際，互いの伝えたいことが発言できていますか。(問 16)
	エ：勤務校の教員は，同僚と良好な人間関係で校内研究・校内研修に取り組めていると思いますか。(問 17)
	オ：勤務校の教員は，校内研究・校内研修を通して，同僚との親近感が増したと感じていると思いますか。(問 18)

４　校内研究・校内研修の予想されること（成果と課題）に関することの結果

４－１　今年度の予想される成果について

表４は、今年度の校内研究・校内研修の予想される成果について、割合の高い上位６項目について、順に並べたものである。全校種で「教職員の知識・見識の更新」「教科指導力向上」への期待が高い一方で、「教職員のチームワーク向上」に対する期待が最も低い。

表４　今年度の校内研究・校内研修の予想される成果

選択肢 / 校種	教職員の知識・見識の更新	教科指導力向上	学校課題の共有	児童・生徒理解の深まり	児童・生徒の学力向上	教職員のチームワーク向上
小（n=169）	81%	73%	62%	67%	58%	55%
中（n=71）	82%	85%	72%	56%	64%	49%
高（n=43）	86%	84%	54%	49%	30%	44%
計（n=283）	83%	78%	63%	62%	56%	52%

４－２　今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果

表５は今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果をまとめたものである。課題意

識が最も高いものは、時間の設定・確保であり、前回調査同様に８割近い学校が課題と感じている。特に、中学校では時間の設定・確保が難しいと感じている学校の割合が増えている。研究成果の積み上げが不十分なことに関しても、課題と感じている学校が多い。

表５　今年度の校内研究・校内研修の課題に関するアンケート結果

選択肢／校種	時間の設定・確保が難しい	教員の参加意欲が十分でない	リーダーシップが十分に発揮されていない	高め合う雰囲気が十分でない	研究成果の積み上げが十分でない	学校の課題解決に十分に繋がっていない
小（n=169）	75(78)%	6(4)%	10(26)%	2(10)%	19(24)%	8(9)%
中（n=71）	83(77)%	8(12)%	22(32)%	4(12)%	32(29)%	7(9)%
高（n=43）	72%	0%	5%	2%	21%	7%
計（n=283）	78(78)%	8(6)%	12(28)%	3(11)%	23(26)%	8(9)%

※括弧内は前回調査の値を表す。高校は前回調査なし。

５　事例校調査について

校内研究・校内研修に係る事例校調査として、神奈川県茅ヶ崎市立萩園中学校と神奈川県横須賀市立大塚台小学校に訪問し、以下のような好事例を視察することができた。

① 事前研、事後研ともにお互いを尊重した対話が重視された研修会を実施していた。
② 指導案等の資料の中に、子どもについてのコメント入りの座席表があった。
③ 研究主任が教職員の適性や持ち味、現在の困りごとについて把握していた。
④ 事後研の中で、授業中の児童生徒の様子や実態から議論を深めていた。
⑤ 学校アンケートの「目指す子どもの姿」や「学校テーマ」を軸に授業研究を行っていた。

Ⅴ　考察

１　「Ⅳ　調査・研究の結果」に関する考察

１―１　手引書の認知度とその実践に関することの結果

手引書の認知度は 60%であり、活用度は 19%であったが、研究仮説の必要性に関しては、「必要である」と回答した割合が、大幅に減少したことから、手引書が提唱する仮説検証型にこだわらない校内研究の考え方が広がっていると考えられる。藤本(2017)は授業研究について、「日常的な授業研究の遂行において、仮説検証型はなじまない。仮説を有して実践に臨むことを決して否定しているのではない。」「教師の授業研究に関する信念、すなわち授業研究観が旧来の仮説検証型を指向するものでは当事者としての成長は期待しづらい。」と述べている。新たな手引書では、引き続き「仮説検証型」から「課題解決型」にシフトする校内研究・校内研修を推進していくことについて掲載する。

１―２　校内研究・校内研修のテーマ設定に関することの結果

学校の研究テーマの設定にあたり、「学校教育目標」や「前年度までの研究の継続」からの影響を強く受けているものの、「学校全体の教職員のニーズ」や「学力調査」や「アンケート」等のデータに基づく校内研究・校内研修テーマの設定はやや低く、教育データのさらなる利活用が求められている。

１―３　校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足に関することの結果

手引書を活用した実践や校内研究・校内研修に各種成果の期待をすることは、基本的心理欲求がおおむね充足される傾向にあると考えられる。

１―４　今年度の校内研究・校内研修の予想されることに関する結果

予想される課題として、「時間の設定・確保」や「研究成果の積み上げ」を挙げている学校の割合は多く、新たな手引書に事例等を載せる必要がある。「リーダーシップ」や「高めあう雰囲気」については、前回調査より大幅に上昇しており、平成 24 年度に策定された「芯の通った学校組織」活用推進プランの影響であると考えられる。

１－５　事例校調査について

事例校調査を通して、事例①より「自由に発言できる心理的安全性の確保」、事例②、③より「授業

者の願いや思いを引き出すこと」、事例④より「子どもの姿から語ること」、事例⑤より「学校の共創ビジョン」の重要性が示唆される。大島(2017)は「教師の自律的な学びを支える関係性の構築」について、「ポイントは1. 授業者の願いや意図の尊重、2.子供の姿の共有、の２点である。授業の願いや意図が受け止められ、具体的な子どもの姿を根拠に改善策が提案される場合は、授業者は自らの自律性が支えられたと感じる。」と語る

また、佐古(2019)は「共創ビジョン作成の方法」について、次の４つの段階を挙げている。

「１.子供たちの実態の確認と共有　２.子供の実態の背景にある要因（根っこの課題）についての探究
３.育成課題（育てたい子供の姿）の設定　４.取組課題（実践課題）の設定」

上記の研究者の提唱する視点についても、紹介する場を新たな手引書には設けたい。

２　成果と課題

本調査は、平成 23 年と令和６年の比較により、校内研究・校内研修について、アンケート調査から把握することができた。調査の結果、

１.手引書の活用状況
２.手引書の取組と校内研究・校内研修における心理的欲求充足に関連があること
３.学校が自律的に自校の課題からテーマを設定していくこと
４.校内研究・校内研修における時間の設定・確保、成果の積み上げ、組織的取組が課題であること、
５.新たな手引書の方向性の５点が分かった。

上記より、本調査研究は県内において実施される校内研究・校内研修についての実態を知り、新たな手引書の方向性を示す貴重な資料となったと言える。課題としては、県外の先進校への視察を通して事例を収集することができたが、県内の学校の事例を得ることができなかった。

３　次年度の研究に向けて

次年度の調査研究では、以下２点を実施する。

１点目は、インタビュー調査等を通した実践事例の収集である。

２点目は、手引書の改訂にむけて、組織的な学校課題の解決に寄与できる掲載内容の確定である。具体的には以下の４項目を紹介できる内容としたい。

１.校内研究・校内研修の時間確保に向けた組織的取り組み　２.学校課題の焦点化に向けた ICT 活用
３.校内研修の短時間化の手立てと推奨時期　４.新しい事例校

今回、手引書を見直す中で、手引書が校種を問わず、多様な学校課題の改善・解決を目指す「課題解決型校内研究」を推進するものであることが確認できた。新たな手引書には、研究者から評価されている[ii]「課題解決型校内研究」の部分は残しつつ、校内研究・校内研修にて多くの学校が課題として挙げている問題の解決に繋がる内容を掲載し、児童生徒に還元できる組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修を推し進めるものにしたいと考えている。

Ⅵ　参考文献等

大島崇　「『授業研究』を創る」鹿毛雅治・藤本和久＝編著　教育出版 第１部　第３章
藤本和久「『授業研究」を創る』鹿毛雅治・藤本和久＝編著　教育出版 第１部　第２章
佐古秀一「管理職のための学校経営 R-PDCA」　明治図書

註

[i] Deci & Ryan が提唱した自己決定理論における重要な要素。個人の内面的な適応状態の指標として3 つの基本的心理的欲求(自律性への欲求、有能さへの欲求、関係性への欲求)の充足を挙げている。

[ii] 石井英真・熊井将太・川地亜弥子・藤本和久・赤木和重・渡辺貴裕・亘理陽一・木村拓也・杉田浩崇・山下晃一（2021）「流行に踊る日本の教育」163-170 頁

【別添資料１：アンケート質問および回答一覧】

・各質問と校種別の回答状況は以下の通りである。
・表において、小学校は「小」、中学校は「中」、高等学校は「高」と表記している。
・回答の割合は、小数第１位を四捨五入した値で示しているため、100%にならない場合がある。
・【質問１】【質問２】【質問３】については、フェイスシートのため、省略している。
・【質問７】については、学校ごとの校内研究・校内研修テーマのため、そのままの形で掲載せずに、30 校以上で用いられている頻出語をまとめた。

【質問４】今回、アンケートを回答される方は、どなたでしょうか。

ア：校長
イ：副校長・教頭
ウ：主幹教諭
エ：指導教諭
オ：研究主任（研修主任）
カ：研究（研修）を担当する教職員
キ：学年主任
ク：その他の教職員

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク
小（n=169）	0%	3%	1%	7%	85%	4%	1%	0%
中（n=71）	1%	2%	2%	7%	80%	2%	3%	0%
高（n=43）	0%	27%	22%	33%	4%	8%	0%	4%
計（n=283）	0%	6%	4%	11%	71%	4%	2%	0%

【質問５】平成 26 年３月に大分県教育センターが発行した「一層やりがいのある校内研究」手引書について、あてはまる番号を１つ選んでください。

ア：知っているし、校内で活用したことがある
イ：知っているが、校内で活用したことがない
ウ：知らない

選択肢／校種	ア	イ	ウ
小（n=169）	22%	36%	42%
中（n=71）	18%	47%	35%
高（n=43）	9%	54%	37%
計（n=283）	19%	41%	40%

【質問６】今年度の学校全体の校内研究・校内研修テーマの設定について、あてはまるものを選んでください。

ア：設定している
イ：設定していない

選択肢／校種	ア	イ
小（n=169）	100%	0%
中（n=71）	100%	0%
高（n=43）	64%	36%
計（n=283）	95%	5%

【質問７】今年度の学校全体の校内研究・校内研修テーマを教えてください。

	小学校（169校）	中学校（71校）	高校（28校）	全体（268校）
育成	99（59%）	46（64%）	13（46%）	158（59%）
授業	79（47%）	33（46%）	21（75%）	133（49%）
学び	65（39%）	37（51%）	11（39%）	113（42%）
力	49（29%）	37（51%）	23（82%）	109（41%）
考え	77（46%）	15（21%）		92（34%）
主体的	57（34%）	23（32%）	10（36%）	90（34%）
子ども	74（44%）			74（28%）
できる	48（28%）	19（26%）		67（25%）
表現	47（28%）	16（22%）	3（11%）	66（25%）
生徒		49（68%）	14（50%）	63（23%）
自分	43（25%）	10（14%）		53（20%）
対話	22（13%）	8（11%）	5（18%）	35（13%）
学習	17（10%）	11（15%）	6（21%）	34（13%）
自ら	21（12%）	9（13%）	1（4%）	31（12%）
活動	20（12%）	10（14%）	1（4%）	31（12%）
学ぶ	15（9%）	13（18%）	3（11%）	31（12%）

【質問８】今年度の学校全体の研究テーマは前年度以前から継続されているものですか。あてはまるものを選んでください。

ア：今年度から新たに設定された
イ：昨年度から継続している
ウ：２年前から継続している
エ：３年以上前から継続している

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ
小（n=169）	33%	30%	23%	13%
中（n=71）	37%	39%	18%	6%
高（n=28）	18%	32%	21%	29%
計（n=268）	32%	33%	21%	12%

【質問９】どなたが今年度の学校全体の研究テーマの設定にかかわりましたか。あてはまるものを選んでください。（複数選択可）

ア：校長
イ：副校長・教頭
ウ：主幹教諭
エ：指導教諭
オ：研究主任（研修主任）
カ：研究（研修）を担当する教職員
キ：学年主任
ク：その他の教職員
ケ：児童生徒
コ：地域の方や保護者

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
小（n=169）	92%	82%	16%	14%	95%	36%	18%	59%	0%	0%
中（n=71）	94%	82%	24%	14%	96%	42%	40%	47%	1%	0%
高（n=28）	60%	79%	64%	86%	18%	39%	18%	18%	0%	0%
計（n=268）	90%	81%	23%	22%	88%	38%	29%	52%	0%	0%

【質問 10】研究テーマの設定にあたって、以下の 1.～15. の要素はどれほど影響しましたか。それぞれの要素ごとに、以下の①～⑤で回答してください。⑤の「とても影響した」は特に影響したものを３つまでとしてください。

１．昨年度までの研究成果や研究関心の継続

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	1%	1%	11%	42%	44%
中（n=71）	1%	3%	8%	40%	47%
高（n=28）	3%	0%	28%	34%	34%
計（n=268）	1%	1%	13%	42%	45%

２．自治体（県や市）による方針や要請

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	6%	12%	26%	45%	11%
中（n=71）	4%	10%	32%	42%	13%
高（n=28）	19%	13%	31%	22%	16%
計（n=268）	7%	12%	29%	42%	12%

３．学習指導要領

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	4%	7%	26%	57%	6%
中（n=71）	1%	8%	36%	47%	7%
高（n=28）	6%	0%	6%	66%	22%
計（n=268）	4%	6%	28%	57%	8%

４．学校教育目標

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	0%	0%	9%	52%	39%
中（n=71）	0%	0%	13%	35%	53%
高（n=28）	0%	0%	6%	50%	41%
計（n=268）	1%	0%	9%	49%	44%

５．管理職（校長・副校長・教頭）の専門性

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	16%	23%	27%	29%	5%
中（n=71）	7%	19%	38%	31%	6%
高（n=28）	19%	28%	28%	22%	3%
計（n=268）	14%	23%	31%	29%	5%

6．研究主任や研究部など研究を担当する教職員の専門性

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	17%	23%	31%	27%	4%
中（n=71）	7%	22%	36%	32%	3%
高（n=28）	16%	22%	16%	38%	10%
計（n=268）	15%	23%	31%	30%	4%

7．学校全体の教職員のニーズや意見

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	1%	4%	13%	46%	37%
中（n=71）	0%	0%	31%	49%	21%
高（n=28）	6%	3%	22%	60%	10%
計（n=268）	1%	3%	20%	49%	30%

8．教職員数や若手の比率といった職員構成

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	15%	23%	30%	24%	8%
中（n=71）	11%	26%	31%	26%	6%
高（n=28）	28%	25%	19%	22%	6%
計（n=268）	16%	25%	30%	25%	7%

9．学力調査やアンケートに基づく児童の実態

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	2%	5%	19%	47%	27%
中（n=71）	3%	0%	17%	49%	32%
高（n=28）	6%	3%	19%	44%	28%
計（n=268）	3%	3%	19%	49%	29%

10．児童生徒のニーズや意見

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	15%	21%	31%	27%	5%
中（n=71）	3%	11%	43%	38%	6%
高（n=28）	13%	19%	22%	44%	3%
計（n=268）	12%	19%	34%	33%	5%

11．地域や保護者のニーズや意見

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	20%	28%	30%	19%	2%
中（n=71）	3%	31%	46%	19%	1%
高（n=28）	6%	34%	19%	34%	6%
計（n=268）	14%	31%	34%	21%	3%

12. 地域の良さやリソース（資源）

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	22%	34%	23%	17%	4%
中（n=71）	8%	42%	32%	17%	1%
高（n=28）	13%	34%	19%	25%	9%
計（n=268）	18%	37%	25%	18%	4%

13. 学校の歴史や伝統

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	26%	32%	27%	15%	1%
中（n=71）	8%	42%	35%	15%	0%
高（n=28）	16%	22%	34%	25%	3%
計（n=268）	21%	34%	31%	16%	1%

14. 小中や中高の校種間連携

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	23%	26%	24%	19%	9%
中（n=71）	7%	26%	35%	28%	4%
高（n=28）	22%	28%	13%	31%	6%
計（n=268）	19%	27%	26%	24%	7%

15. 現在、直面している学校課題

ア：影響しなかった
イ：ほとんど影響しなかった
ウ：やや影響した
エ：影響した
オ：とても影響した（３つまで）

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	2%	2%	15%	47%	34%
中（n=71）	0%	0%	11%	47%	42%
高（n=28）	6%	0%	22%	41%	31%
計（n=268）	2%	1%	15%	48%	37%

【質問 11】校内研究を実施する上で「研究仮説」を立てることが必要だと思いますか。あてはまるものを選んでください。

ア：研究仮説は必要である
イ：研究仮説はどちらかといえば必要である
ウ：研究仮説はどちらかといえば必要でない
エ：研究仮説は必要でない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ
小（n=169）	46%	31%	17%	7%
中（n=71）	32%	46%	15%	7%
高（n=28）	32%	61%	4%	4%
計（n=268）	41%	38%	15%	6%

【質問 12】１年間といった、決まった「研究期間」ではなく、学校課題に応じた「研究期間」を設定していますか。あてはまるものを選んでください。

ア：設定している
イ：設定していない

選択肢／校種	ア	イ
小（n=169）	30%	70%
中（n=71）	31%	69%
高（n=29）	28%	72%
計（n=269）	30%	70%

【質問 13】校内研究・校内研修を進める上で、少人数(３～５名程度)の「チーム」を組織していますか。あてはまるものを選んでください。

ア：組織している
イ：組織していない

選択肢／校種	ア	イ
小（n=169）	83%	17%
中（n=71）	74%	26%
高（n=43）	54%	47%
計（n=283）	77%	24%

【質問 14】勤務校の教員は校内研究・校内研修に主体的に取り組めていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

ア：取り組めている
イ：やや取り組めている
ウ：どちらともいえない
エ：あまり取り組めていない
オ：取り組めていない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	58%	39%	4%	0%	0%
中（n=71）	46%	46%	8%	0%	0%
高（n=43）	49%	33%	19%	0%	0%
計（n=283）	54%	40%	7%	0%	0%

【質問 15】勤務校の教員は，校内研究・校内研修の際，個々の能力が発揮できていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

ア：できている
イ：ややできている
ウ：どちらともいえない
エ：あまりできていない
オ：できていない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	49%	46%	5%	0%	0%
中（n=71）	44%	45%	10%	1%	0%
高（n=43）	28%	56%	16%	0%	0%
計（n=283）	46%	47%	8%	0%	0%

【質問 16】勤務校の教員は，校内研究・校内研修の際，互いの伝えたいことが発言できていますか。あてはまるものを選んでください。

ア：できている
イ：ややできている
ウ：どちらともいえない
エ：あまりできていない
オ：できていない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	58%	37%	5%	1%	0%
中（n=71）	63%	31%	7%	0%	0%
高（n=43）	58%	30%	12%	0%	0%
計（n=283）	60%	34%	6%	0%	0%

【質問 17】勤務校の教員は，同僚と良好な人間関係で校内研究・校内研修に取り組めていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

ア：取り組めている
イ：やや取り組めている
ウ：どちらともいえない
エ：あまり取り組めていない
オ：取り組めていない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	69%	27%	4%	0%	0%
中（n=71）	63%	32%	6%	0%	0%
高（n=43）	56%	35%	9%	0%	0%
計（n=283）	66%	30%	5%	0%	0%

【質問 18】勤務校の教員は，校内研究・校内研修を通して，同僚との親近感が増したと感じていると思いますか。あてはまるものを選んでください。

ア：感じている
イ：やや感じている
ウ：どちらともいえない
エ：あまり感じていない
オ：感じていない

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ
小（n=169）	37%	50%	12%	0%	0%
中（n=71）	25%	51%	21%	2%	0%
高（n=43）	28%	47%	23%	0%	2%
計（n=283）	34%	50%	16%	1%	0%

【質問 19】今年度の校内研究・校内研修の予想される成果について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）

ア：教職員の知識・見識の更新
イ：教職員のチームワーク向上
ウ：児童生徒理解の更なる深まり
エ：教科指導力向上
オ：学校課題の共有
カ：学級経営力向上
キ：児童生徒の学力向上

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
小（n=169）	81%	55%	67%	73%	62%	30%	58%
中（n=71）	82%	49%	56%	85%	72%	15%	64%
高（n=43）	86%	44%	49%	84%	54%	5%	30%
計（n=283）	83%	52%	62%	78%	63%	23%	56%

【質問 20】今年度の校内研究・校内研修の課題について、あてはまるものを選んでください。（複数回答可）

ア：時間の設定・確保が難しい。
イ：教員の参加意欲が十分でない。
ウ：リーダーシップが十分に発揮されていない。
エ：批評が時として批判となり、高め合う雰囲気が十分でない。
オ：仮説の検証（客観性等）が十分でない。
カ：研究成果の積み上げが十分でない。
キ：研究の内容が日常の教育実践に十分活かされていない。
ク：学校の課題解決に十分に繋がっていない。
ケ：ノルマ化され、義務的な業務になっている。
コ：形骸化されてしまい、形だけ整えるものとなっている。

選択肢／校種	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
小（n=169）	75%	6%	10%	2%	16%	19%	9%	8%	8%	6%
中（n=71）	83%	8%	22%	4%	18%	32%	10%	7%	10%	1%
高（n=43）	72%	0%	5%	2%	21%	21%	9%	7%	14%	2%
計（n=283）	78%	8%	12%	3%	23%	23%	10%	8%	10%	4%

【質問 21】効果的・効率的な校内研究・校内研修の在り方はどうあれば良いか、ご意見等をご記入ください。

主な内容

1. 研究・研修の計画とマネジメント

・明確な計画立案：研究テーマや年間計画を明確に設定し、詰め込み過ぎず、焦点を絞る。
・管理職・研究主任のリーダーシップ：柔軟なマネジメントで全職員が主体的に関われる環境を整備する。
・前年度の引き継ぎとチーム連携：引き継ぎを通じて研究を継続し、職員間の共通理解を図る。

2. 効率的な研修運営

・時間確保と短時間研修：勤務時間内に収まるようにし、負担感を軽減。30～60 分程度の研修設定や午前中授業を活用する。
・日常実践との連携：日常の取り組みや実践事例を共有し、研修に活かす。
・ICT の活用：資料共有やグループ討議に ICT 機器を活用して効率化を図る。

3. 教職員の主体的な関与

・少人数チームでの討議：職員が発言しやすい環境を整え、全員が自分事として取り組む体制を構築する。
・若手教職員の支援：若手が発言しやすい場作りや具体的なモデル提示を行う。
・心理的安全性の確保：スムーズなコミュニケーションと良好な人間関係を重視する。

4. 実践と検証の循環

・成果の視覚化：研究内容を見える化し、全員で共有・再検証をする。
・課題解決型の研究：児童や学校の実態に基づき、課題を解決する実践を進める。
・継続的な改善：定期的に進捗を検証し、柔軟に改善を図る。

5. 研究内容の実効性と即時性

・教育実践に直結：研究成果が日常の授業や学級経営にすぐ活用できる内容にする。
・児童の成長を重視：児童の学習や生活の実態に即した指導法を追求する。
・専門性の向上：外部専門家の活用や互見授業を充実させる。

6. 負担軽減と働き方改革との両立

・過度な準備負担の軽減：効率的な資料作成やデータ活用で教職員の負担軽減を図る。
・気軽に取り組める研究環境：構えず気楽に参加できる校内研修の実現を目指す。

【別添資料２：調査内容構成図】

調査主題	調査内容	調査内容	調査項目の内容		分析項目	調査目的
「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の推進に関する調査研究	手引書の認知度と提唱する実践に関すること	手引書の認知度・活用度	平成２６年３月に大分県教育センターが発行した「一層やりがいのある校内研究」手引書の認知度・活用度	5	校種別の手引書の認知度・活用度	「組織的な学校課題解決に向けた校内研究・校内研修」の手引書の改訂に向けた実態把握
		研究仮説の必要性	校内研究を実施する上での「研究仮説」を立てることの必要性	11	校種別の研究仮説の必要性	
		期間設定と組織づくりについて	１年間といった、決まった「研究期間」ではなく、学校課題に応じた「研究期間」の設定の有無	12	手引書が提唱する校内研究の取組状況	
			校内研究・校内研修を進める上で、少人数（３～５名程度）の「チーム」の組織編成の有無	13		
	校内研究・校内研修のテーマ設定に関すること	研究テーマの設定について	今年度の学校全体の研究テーマの設定の有無	6	研究テーマにおける校種別傾向	
			今年度の学校全体の研究テーマ	7		
			今年度の研究テーマの継続性について	8		
		研究テーマに影響した要因について	今年度の研究テーマ設定に関与した人物	9	研究テーマ設定に係る人的要因	
			管理職（校長・副校長・教頭）の専門性	10―5		
			研究主任や研究部など研究を担当する教職員の専門性	10―6		
			学校全体の教職員のニーズや意見	10―7		
			昨年度までの研究成果や研究関心の継続	10―1	研究テーマ設定に係る内的要因	
			学校教育目標	10―4		
			学力調査やアンケートに基づく児童の実態	10―9		
			児童生徒のニーズや意見	10―10		
			教職員数や若手の比率といった職員構成	10―8		
			現在、直面している学校課題	10―15		
			地域や保護者のニーズや意見	10―11	研究テーマ設定に係る準内的要因	
			地域の良さやリソース（資源）	10―12		
			学校の歴史や伝統	10―13		
			学習指導要領	10―3	研究テーマ設定に係る外的要因	
			自治体（県や市）による方針や要請	10―2		
			小中や中高の校種間連携	10―14		
	校内研究・校内研修における基本的心理欲求充足に関すること	校内研究・校内研修における教職員の意識	勤務校の教員の校内研究・校内研修への主体性	14	研究・研修への自律性	
			勤務校の教員の校内研究・校内研修における個々の能力の発揮	15	研究・研修への有能感	
			勤務校の教員の校内研究・校内研修における発言の自由度	16	研究・研修への関係性	
			勤務校の教員の校内研究・校内研修における同僚との良好な人間関係	17		
			勤務校の教員の校内研究・校内研修における同僚との親近感	18		
	校内研究・校内研修に予想されること	成果意識	今年度の校内研究・校内研修の予想される成果	19	研究・研修への関係性	
		課題意識	今年度の校内研究・校内研修の予想される課題	20		
			効果的・効率的な校内研究・校内研修の在り方	21		